慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	シュンペーターと計量経済学(1)
Sub Title	Schumpeter and econometrics (1)
Author	蓑谷, 千凰彦
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1984
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.77, No.1 (1984. 4) ,p.18- 40
JaLC DOI	10.14991/001.19840401-0018
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19840401-0018

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

シュンペーターと計量経済学（1）

蓑　谷　千　凰　彦

目　次

序
1　科学としての経済学
(1)　経済学は科学か
(2)　社会科学の成立
(3)　科学的精神の後退
2　経済理論
(1)　理論は事実に対する図式である
(2)　理論とは道具箱であり，たんなる説明的仮説ではない
(3)　理論は諸要素間の関数的関係を記述する
(4)　シュンペーターの立場は「科学主義」ではない
(5)　均衡理論の意義
3　統計
(1)　統計の必要性
(2)　忘れられた数量分析
(3)　計量経済学のシュトゥルム・ウント・ドラングの時代（以上本号）
4　歴史
(1)　歴史の重要性
(2)　社会政策学会批判とシュモラー評価
5　理論と実証
(1)　理論と事実
(2)　理論と検証
(3)　補助仮説の経験的妥当性の検証
(4)　無意味な帰納とみせかけの検証
(5)　にせの問題とマックス・ウェーバー批判
6　分析の実際例――景気循環分析
(1)　第1次接近――理論モデルの提示
(2)　第2次接近――理論モデルへの現実的要素の加味
(3)　第3次接近――3循環図式の採用

序*

「知性の怠惰に発する無知」とシュンペーターは厳しく断じた。18世紀末から19世紀末までの約100年間という数量分析の空白時代を指してである。ウイリアム・ペティ（1623～1687）の『政治算術』(1690)からアーヴィング・フィッシャー（1867～1947）の『貨幣の購買力』(1911)，ヘンリー・ムーア（1869～1958）の『賃金の法則』(1911)によって開始される1910～30年代の「計量経済学のシュトゥルム・ウント・ドラングの時代」（レオンチェフ）に到るまで，本格的な見るべき理論的・数量的分析がなかったと考えるならば，実に約250年の長きにわたって，経済理論と統計的分析が結びつくことなく，「知性の怠惰」が続いたことになる。

ペティはすでに『租税貢納論』(1662)で近代経済学の礎をきづき，『政治算術』において理論的分析と数量的分析の統一を図った。グレゴリー・キング（1648～1742）は小麦収穫高と小麦価格との間に，キングの法則として知られるようになった経験法則を発見した。17世紀の政治算術学派が発

* この論文の内容の一部は58年度慶應義塾学事振興資金によるものである。記して感謝したい。

見した最初の統計的経済法則である。

「ペティは，事実それ自体をして語らしめよ，というようなスローガンには決して因われていなかった。ペティは終始一貫して理論家であった。しかも彼は科学の本領はまさしく測定にあるとなすような理論家の一人であった。すなわち数値的事実に働きかける分析要具を案出し，その他のすべてを心から軽蔑し，かつまた自分の一般的命題は，相互に決して袂を分つことを許されない数値と推理との結合生産物にほかならぬとしていた理論家の一人であった[(1)]」とシュンペーターはペティを激賞する。

キングは正常収穫時からの乖離によって表された収穫高と，趨勢値からの乖離で示された価格との間に経験的な規則性を発見した。統計的需要曲線が17世紀末にすでに発見され，しかも正常状態を仮定してそこからの乖離を測るという，小麦以外の財についても容易に適用可能なキングのこの需要関数計測方法が，その後ムーアの『経済循環』(1914) に至るまで約200年以上にわたって看過されてきた。キングの方法を踏襲し，あるいは改善しようという試みがなされなかったという事実は，「経済学者たちの不思議な（正に悲しむべき）鈍感さ[(2)]」を示すものにほかならない。

ペティ，キングによって代表される政治算術学派の数量分析が，なぜ2世紀以上の長期にわたって一層の研究を換起せず，惰眠をむさぼり，枯れ凋んでしまったのか。しかし他方，数量分析は完全に忘れ去られてしまったわけではなく，暗闇のなかで細々といかにして命脈を保つことができたのか。これらの疑問に答えることは経済分析の歴史のなかの空白の数ページを埋める作業であり，それは将来の課題である。

1908年，まだ依然として計量経済学のページが白紙のまま残されていた頃，若冠25歳で，処女作『理論経済学の本質と主要内容』を世に問うたシュンペーターは，同書第5部第5章「理論経済学の発展可能性」のなかで，計量経済学の必要性と発展可能性をすでに瞭察している。アメリカでムーアやフィッシャーが活躍する時期は1910年代へ入ってからであり，1908年にはヨーロッパでは計量経済学の胎動さえ感じられていない頃であることを考えると，理論経済学者シュンペーターがきわめて明確に経済学の発展方向を洞察し，自らの研究方向をも予見していることは驚嘆に値する。「われわれの科学と統計学の方法および事実材料との連関は……明白である。統計学は経済学に対して何をなし得るか，という好んで発せられる問いは，経済学をわれわれの体系と解するならば，今や全くひとりでに解答を与えられる．われわれは，われわれにとって基礎的な価値関数[(3)]の確定のために統計学を必要とする。われわれのこれに期待するところは大きい。すでにごく小さな成果でさえ，たとえ嘲笑され批判されようとも（そうされることは確かであるが）——そうして最初の試みに対するかかる批判ほど容易なことはない——われわれの科学の発展の途上における前進の力強き一

注（1）〔18〕438頁。
（2）〔18〕443頁。
（3）限界効用曲線のこと。

歩を意味するであろう[4]」。

1930年12月29日，世界経済恐慌の嵐が吹きすさぶなかで，計量経済学会が創立された。1933年に創刊された学会機関誌「エコノメトリカ」創刊号を飾る“計量経済学の常識” Common Sense of Econometricsという論文において，シュンペーターは，次のように，経済現象の数量的側面を強調し，数量分析の必要性を力説した。

経済現象を解明するにあたって，歴史家，民族学者，社会学者等々の研究を軽視し，もっぱら数学的方法のみが卓越していると信じているわけではない。経済生活における多くの非数量的側面は人々の関心事であり，実り多い研究が全く非数量的な思考から生まれることも明らかである。通常の思考様式になんら数学的洗練を加えなくても，あるいは統計数値を入念に操作しなくても，経済現象について多くのことを発見し，叙述することができる。しかし，経済学は，社会科学や道徳科学のなかで数量的であるばかりでなく，物理学を含めてあらゆる科学のなかでもっとも数量的である。質量，速度，電流などの概念を数値的にあつかうためには，まず測定方法を明確にしなければならない。ところがほとんどの基本的経済事実は，数値をもつ数量として観測されている。運動を観測可能量としてとらえなくても運動は存在しうるが，数値的表現から独立な価格は存在しえない。計量経済学はこの明らかな事実を認識し，数量的側面がもたらす結果を分析しようとする試みにほかならない。具体的問題を数量的に，可能な限り数値に訴えて議論することによって，異なった見解を有している人々の間で協同の精神と習慣が創られるようになるであろう。われわれに必要なことは，科学方法論議ではなく，数量分析の具体的な成果にもとづいて議論することである。数量分析を通じてのみ，われわれの科学は，政治家や企業家に実際的なアドバイスを与えることができる。議論を数値で展開しない限り，われわれの科学の声はひどい間違いを追い払うことはあるかも知れないが，決して実践的な人々によって傾聴されることはないであろう。

1671年から76年頃にかけて執筆されたと言われている[5]『政治算術』において，ペティは次のよう

注（4）〔9〕589頁。

（5）『政治算術』が公刊されたのは名誉革命の2年後1690年，著者ペティの死亡（1687）後である。執筆は1671年から76年頃と言われている。執筆時のイギリス王はチャールズ2世である。チャールズ2世は在位1660～1685年，清教徒革命によって処刑されたチャールズ1世の子。フランスに亡命し，後ネーデルランドに移り，お気に入りの女たちを左右に侍らせ，快楽にふけり，「陽気な王様」といわれた。クロムウェル（1599～1658）の軍事独裁による革命の行き過ぎに対する反動として王政復古，チャールズ2世は1660年王位に復帰した。チャールズ2世はフランスのルイ14世を従兄とし，亡命以来ルイ14世の庇護を受けてきた恩があり，さらに王政復古後は財政援助を受けた。フランスに対抗するための3国同盟（イングランド，オランダ，スウェーデン）を無視して，1670年ドーバーの密約をルイ14世と結び，第3次オランダ戦争（1672～74）をひきおこした。1685年チャールズ2世没後，弟ジェームズ2世が即位（16851～688）したが，名誉革命によりジェームズ2世の娘メアリーの夫，オランド総督ウイリアム3世が即位した。『政治算術』の執筆動機は，当時，イングランドに充満していた国運への悲観，オランダ，フランスに追いこされそうな不安を，うつり気やこのみや激情という思弁的議論によってではなく，理論的・数量的分析によって論駁することにあった。実際，ペティは，オランダ，フランス，イギリスの国力を比較して，イギリスはフランスを凌駕し得ると説き，イギリスが世界貿易を掌握できるということを論証した。イギリス優位を説く『政治算術』を，ルイ14世の年金受領者であるチャールズ2世在位中に公刊することは，フランスの怒り，したがってチャールズ2世の怒りを買うことになり，不可能であった。こうして『政治算術』の出版はウイリアム3世治下になるまで延期された。

に自らの立論の方法と態度を明言した。「私は，比較級や最上級のことばのみを用いたり，思弁的な議論をするかわりに，(私がずっと以前からねらいさだめていた政治算術の一つの見本として)，自分のいわんとするところを数（Number）・重量（Weight）または尺度（Measure）を用いて表現し，感覚にうったえる議論のみを用い，自然のなかに実見しうる基礎をもつような諸原因のみを考察するという手つづき（Course）をとったからであって，個々人のうつり気・意見・このみ・激情に左右されるような諸原因は，これを他の人たちが考察するのにまかせておくのである。実際のところ，それら（うつり気等々）を基礎としては，(かりにこれらが基礎といえるにしても)，十二分に語れるものではない(6)」。

『政治算術』から2世紀半経過後，ペティと同じ議論——数量分析の重要性——を，経済学は「エコノメトリカ」誌上で再び展開しなければならなかったのである。これが経済学者の鈍感さと「知性の怠惰」でなくて一体なんであろう。1937年から41年まで計量経済学会会長をつとめたシュンペーターは，計量経済学に多大の期待を寄せ，自らも資本主義過程の理論的・歴史的・統計的分析の副題をもつ『景気循環論』(1939) を著し，実証分析の見事な範を示した。

シュンペーターの計量経済学への期待，恐らく計量経済学にとっては荷が重すぎた過大な期待，は彼のどのような科学観と方法論からもたらされたかを探ってみよう。シュンペーターの科学観を知る上で，科学としての経済学を1でとりあげ，主として計量経済学との関連で科学方法論を2～5で，最後に，畢生の大作『景気循環論』の分析方法を検討し，シュンペーター方法論の実践をみることにしよう。

1　科学としての経済学

（1）　経済学は科学か

経済学がたんに思弁的・形而上学的議論に終始しているにすぎないならば，方法論を問題にしても無意味である。他方，経済学が自然科学とくに物理学と同じ方法論的基礎の上に築かれねばならないとすれば，経済学独自の方法論を論ずることもまたむなしい。

ところで，いったい経済学は科学なのか。現在でさえ依然としてこのような問いを発して孤疑逡巡し，あるいは科学としての経済学を否定して自虐的快感を覚える人さえいる。方法論を論ずる前に，経済学は科学かという問いにシュンペーターはどのように答えるかをみておこう。

科学を，数理的自然科学と類似の方法が使用されているか否かによって定義するならば，経済学は概括的には科学であるとはいえなくなる。もっと広い定義を科学に与えよう。「科学とは，つねに改良せんとする意識的な努力の対象となっているような種類の一切の知識(7)」である，とシュンペ

注（6）〔7〕24頁。
（7）〔18〕12頁。

ーターは言う。このような意識的な努力は，方法とか技術という思考慣習を生み育て，この方法や技術は日常的な思考習慣や実際的知識の範囲をこえることによって，諸事実を掘り出し，これを支配下におく。それゆえ「科学とは事実を発見し，それを解釈し，そこから推理(分析)する・専門化された研究技術を展開してきたような，一切の知識分野をいう」[8]と定義することもできる。

科学は，このように，日常的な思考慣習を離れ，専門的な研究技術を用いて事実を発見してきた。その意味で「科学とは洗練された常識」であり，「道具化された知識」[9]である。

ここで科学があつかう「事実」とは，「観察もしくは実験によって証明せられうる事実」であり，科学的方法として認めることができるのは「証明せられうる事実からの論理的推論」[10]に限られる。しかし今日の科学の概念を，あらゆる時と所を通じて絶対的に妥当するものとみなすのではない。それぞれの時と所における専門的基準にしたがってその科学的性格を評価しなければならない。

シュンペーターのこの考え方は，シンガーの「科学とは，静的な知識体ではなく，むしろ，時代を通じてたどることができる動的な過程である」[11]という見解と同じである。

科学をこのように，日常的思考慣習によってではなく，専門的技術を用いて事実を発見し，解釈し，推理する意識的努力としてとらえるならば，いうまでもなく経済学は科学である。ところでこのような営みは一体いつ頃社会科学に現れたのか。

（2） 社会科学の成立

「あらゆる科学における最初の発見は，その科学自身を発見することにほかならない」というシュンペーターの有名な言葉がある。「「問題」を生起せしめる・一連の相互に関連ある現象の存在を自覚することこそ，明らかにあらゆる分析的努力の前提条件」[12]である。たとえば，出生性比の規則性をズュースミルヒのようにたとえ神の摂理の現れであると解釈しようと，その規則性の発見は科学的認識の始まりである。同様に占星術や，ある数を幸運の数だ不運の数だという迷信のなかに遠大な科学的原理のおもかげがあったのである。あるいは化石は，「全能の創造者がより完全なわれわれ人間をつくりだすための初期の無器用なこころみ」という説明も，近代地質学理論の発展において，まぎれもなく正当な段階であったのである。[13]

このような自覚は，社会諸科学においては，自然法の概念のなかで形成された。その意味で社会科学は18世紀になってはじめて成立した。神学的・哲学的衣裳を払いのけ，形而上学から訣別しようと当時の人々は「経験可能な環の連結体である因果の連鎖」を県命に探りあてようとした。そし

注（8）〔18〕12頁。
（9）以上2箇所とも〔18〕12頁。
（10）以上2箇所とも〔18〕15頁。
（11）〔19〕3頁。
（12）以上2箇所とも〔18〕220頁。
（13）〔19〕1頁。

て「原因と結果のあいだに経験可能なかたちで因果の連鎖が確認されない限り，いかなる説明も説明とは見做さないし，探求の作業も放棄しない，という激しい意欲[14]」に燃えていた。このような意欲こそ社会科学を成立せしめたとシュンペーターは高く評価する。

自然現象，社会現象を問わず，現象の合法則性についての認識は次のような段階を経て自らの地位を獲得していく[15]。合法則性は

(1)現世外的な神々の意志の作用として

(2)世界と同質的なある精神的な「何ものか」の表現体として

(3)なんらかの自然的な「力」として

(4)現象相互間に成立する経験可能な関係として

順次理解されるようになる。それゆえ18世紀の社会科学といえども，本質的には第1段階から出発し，やがて第2段階，第3段階に達した。大多数の者は第2と第3段階の中間でとどまったが，いくつかの局面においては，すでに第4段階に達していた。

第2段階的見解には哲学者，とくにドイツの哲学者が大きな影響力をおよぼした。ヴィルヘルム・フォン・フンボルト（1767～1835），フィヒテ（1796～1879），ヘーゲル（1770～1831），シェリング（1775～1854）の形而上学がそうである。しかしながら社会科学が科学として成立するためには形而上学から訣別しなければならない。

歴史的事実の尊重は形而上学的思考の排斥につながる。「形而上学が影響するということは，社会科学の作業にとっては常に妨害と力の浪費とを意味」する。「ヘーゲルはただ現実を横目で睨んで現実に関する思弁を展開[16]」したにすぎない。そしてヘーゲル主義は社会科学に大きな害毒をもたらした。「ヘーゲル主義が社会科学の仕事のなかにもち込んださまざまの見解や主張は，社会科学にとっては枯渇することなき錯誤の源泉となり，社会科学はこれにたいしてつねに自己防衛しなければならなかった[17]」からである。

社会科学的思考は，神学的論議にかわって経験的事実にもとづく分析を，形而上学的論議にかわって人間精神による現象界の征服を，啼ぎつつ躓きつつであったとはいえ，めざした。それは形而上学者によって詛われ，軽蔑され，多くの人びとの嘲笑を受けながらも，気迫と力と独創性に満ちていた。

自然法の胎内に芽ばえた経済過程の基本問題を探究しようという動きは，プーフェンドルフ（1632～1694），ハチソン（1694～1746），ハチソンからアダム・スミス（1723～1790）へと受け継がれ，『国富論』として結実した。さらに「その新鮮さと独創性と意義とにおいて比類をみないような大

注（14）以上2箇所とも〔12〕29頁。
（15）〔12〕39～40頁。
（16）以上2箇所〔12〕41頁。
（17）〔12〕42頁。

きな成果をあげた自然法の学派[18]」がたったひとつあった。ケネーの学派，重農学派がそれである。

ケネー（1694～1774）の経済表の意義は，①単純化（経済生活を社会諸階級間における支出と生産物の循環としてとらえた），②数量的理論への大きな可能性を開いたこと，③経済均衡の本質――諸部門と諸要素の一般的相互依存関係――を明示的に伝えるための史上最初の方法であったことの3点である[19]。

18世紀は，また歴史が科学へと歩みはじめた世紀でもあった。歴史的事象を形而上学的源泉から導出したり，一回生起的事象の手におえない集合体とみなすのではなく，歴史のなかに必然性を探求するという理論家が現れた。シュンペーターが，「社会諸科学の分野において，およそあらゆる時代を通じて発見されうる最も偉大な思想家の一人[20]」と絶賛するのはヴィコ（1668～1744）である。ヴィコの『新科学の原理』（1721）には，個々の民族の歴史の相互的平行性の思想，民族生活における同一状態・類似状態の周期的回帰の思想，歴史的叙事詩のなかに規則性をみいだそうとする傾向がみられる[21]。

心理学的手法を歴史に適用したイーゼリン（1728～1782）の『人類史』（1791），風土，環境，伝統によって歴史的事象を説明しようとしたカルダー（1744～1803）の業績は歴史を形而上学から解放した。「歴史の記述が単なる記述にとどまっている限り，それは骨董品蒐集[22]」あるいは叙事詩にすぎない。歴史的素材が科学の世界へ入ってくるのは，それらが科学的思考の対象となり，分析的解明がなされる場合である。歴史的素材は抽象化の基盤として利用され，この生の素材から多少なりとも普遍性を有する規則性が抽出されるようになってはじめて歴史の科学化への歩みが始まる。法則性への認識は「具体的内容をもつ具体的な現象がそれぞれ法則から導出されるということを意味するのではなく，現象の識別可能な諸要素をわれわれが理解できるようになるということを意味する[23]」にすぎない。

（3） 科学的精神の後退

「社会科学の英雄時代」であった18世紀が終り，19世紀へ入ると，社会科学は麻痺状態におちいってしまった。「かつては若々しい生命が支配し，独創的な思想がかけめぐっていたその場所において，もはやいっさいが進歩をやめてしまった。自然法という普遍的社会科学のすばらしい遺産は不器用な手でいじりまわされ，病み衰え，朽ち果てて[24]」しまったのである。

注（18）〔12〕74頁。
（19）〔18〕504頁。
（20）〔18〕279頁。
（21）〔12〕80頁。
（22）〔12〕76頁。
（23）〔12〕77頁。
（24）〔12〕98頁。

この18世紀の科学的精神からの逸脱例として，カーライル（1795～1881），コント（1798～1857），歴史学派がある。カーライルは，「歴史とは偉大なる人物の伝記によって織りなされるものであり，彼らの行為や動機に歴史的事実の窮極的根拠が存し，しかもこの窮極の根拠そのものは分析不可能な神的な閃光である」と説いている。人間の自律性を語り，功利主義的哲学や利潤追求に怒りをぶちまけ，フランシス・ベーコン（1561～1626）を侮蔑した。このようなカーライルの言明は「カーライル自身の世界においては真実であり，偉大なこと」であったかもしれないが，「実は彼の世界そのものがまったく浮世離れした彼岸にあった」[25]。あらゆる科学は芸術家にとっては「陰うつ」であることに気づかず，経済学を陰うつな科学 dismal science と定義し，拍手かっさいを浴びたのもカーライルであった[26]。

歴史的個性を重視し，民族精神を発見したロマン主義者たちも18世紀的知性からの逸脱例である。民族精神はそれ自体としては価値ある思想であったが，それは「ロマン主義者たちの手のなかで，ひとつのきまり文句ないしは形而上学的装飾文字」[27]になってしまった。貨幣は国民的価値あるいは国民的力の表現であるというようなアダム・ミュラー（1779～1829）の貨幣の形而上学的解釈は，経済分析上何の意義もない[28]。

18世紀の分析的立場からの逸脱例としてコントをあげているのは，シュンペーターの科学観を知る上で興味深い。コントは『実証哲学講義』（1830～42）において，社会現象も自然科学と同じ方法で統一的にあつかうことができると主張した。「あらゆる実証的哲学の基本的特徴は，すべての現象を不変的な自然法則に従うと見なすことであり，この法則の正確な発見と，それを可能な限り少ない数に整理することがわれわれの全努力目標なのである」[29]。ところがコントによれば，科学は数学（理論力学を含む）に始まり，天文学，物理学，化学，生物学，社会学へと複雑さを増大させる。そしてより複雑でない科学に適用可能であった方法，たとえば数学を社会学に適用することはできなくなる。社会学には歴史的方法を採用しなければならないという主張となり，科学の方法の統一という見解によって通常予想される抽象化，孤立化，数学的方法の適用を，コントは主張しているのではない。そしてコントはついに「人類の目標とは何か」，「人類の進歩とは何か」というような，もっとも極端なかたちの形而上学的考察に耽溺することになってしまった[30]。

歴史学派も18世紀の科学的精神を麻痺させた責任の一端を担わなければならない。歴史学派の特徴は，社会科学のもっとも重要な，第一の課題として，歴史的な，記述的な細目研究を掲げる態度にある。この歴史的・個別的研究のなかにただよっている精神は「歴史的精神」（ロッシャー）であ

注（25）以上3箇所とも〔12〕102頁。
（26）〔18〕863頁。
（27）〔12〕104頁。
（28）〔18〕887頁。
（29）〔1〕295頁より引用。
（30）〔12〕108頁。

る。すなわち「史料自体に没頭することへの感興，具体的・個別的現象の内面的理解への努力」のことである。「この理解は，あらゆる定型化に堪ええないものであり，またこれに対しては，この定型化とりわけ概括化は，観照されたものや感得されたものの豊かさに対比すると，せいぜい憐れむべき半真理にほかならず，多くの場合にはその歪曲とさえ映ぜざるを得ないのである」[31]。

一方で民族精神とか人格の統一性をもてはやし，他方で精密な事実研究を原理として掲げた歴史学派は，証拠資料いじりこそ本来の学問的仕事であると考え，自然法思想にふくまれる理論的知識を無視したために，分析装置に対して全く無理解であった。自然法のなかから新たな科学が誕生し，育ち始めようとしていたにもかかわらず，歴史学派は「産湯とともに赤ん坊を流してしまった」[32]のである。

自然法思想のなかから芽生えた社会諸科学，とりわけ経済学が科学として自己を定立するためには，形而上学から訣別し，現象相互間に成立する経験可能な関係として合法則性を認識しなければならない。現象間の相互依存が経験可能な関係としてとらえられるためには，理論的・統計的・歴史的認識が要求されることは当然である。ただしシュンペーターの言う合法則性とは「客観的・必然的法則」ではない。それはシュンペーターが社会主義の到来を予見する方法，すなわち観察しうる諸傾向を診断することによって，条件つき予見をしていることを考えれば明らかであろう。諸傾向を妨げる諸要因，あるいは諸傾向を逆転させる力が働くという可能性をシュンペーターは注意深く観察しており，社会主義への道が必然的に資本主義が歩まねばならぬ道だとは主張していないからである。

2　経 済 理 論

経済問題について思考したり，議論したり，記述したりするとき，科学的経済学者と素人を区別するのは，歴史，統計および理論の3つの分析技術を身につけているか否かである，とシュンペーターは言う。したがって以降で，理論，統計，歴史の順序でシュンペーターのこれらに対する考え方を，主として計量経済学との関連で検討しよう。

（1） 理論は事実に対する図式である

理論は現実のある側面を描写するための図式（シェーマ）であり，興味ある結論を樹立するために作られる道具である。「記載は事実の目録作成に止まるが，理論は事実の変形を企てる．しかしそれは特別に

注（31）〔11〕278～9頁。
（32）〔12〕113頁。

広大なる・または神秘なる目的のためではなく，単に事実をよりよく展望せんがためである。理論は事実に対するひとつの図式(シェーマ)を構成するが，この図式の目的は見渡し難き多くの事実を簡潔に表現にもたらす[33]」。

図式である以上あらゆる事柄をとり入れることはできないし，何をとり入れるべきかが論争の種となる。国民経済の動力は個人か社会か，人間を支配している動機は利己か利他か，経済的動機は名誉心，支配欲，祖国愛などより大きくて決定的な役割を演ずるかどうか，人間の行為は科学的記述を許すほど単純かつ規則的か，あるいは人間は自由意志をもっているから精密な分析は不可能ではないか。これらの問題をすべて図式のなかでとりあげようとすれば，経済学は明晰性と独立性を断念しなければならない。なぜならこれらの問題を明晰かつ厳密に解決することはできないし，一部は形而上学の問題である。形而上学的議論を始めれば，すべてが深い霧に閉ざされ，暗雲がたちこめる。またこれらの問題は心理学，生理学，生物学と関連しており，それらの領域の成果を経済学にとり入れようとすれば，経済学者はディレッタントとなり，経済学の自律性が失われる[34]。

シュンペーターの上述の見解に異論はない。問題は2つある。明晰性と独立性を維持しつつ，分析目的にとって本質的な事柄が抽象されているか。いいかえれば，捨象されている事柄のなかに重要な，本質的なものはないか。本質的な要素が見失われていないかどうかをいかにして検証するのか。経済学者はこのような疑問を飽きもせずくり返し提出し，思弁的議論に耽ってきた。消費者は，所得制約のもとで効用極大化を図るという経済合理性を貫く経済人ではなく，もっと不合理な存在ではないか。いや，人間行動の合理性ではなく不合理性に着目することによってもたらされるのは混沌に過ぎず，与件変化にいかに反応するかさえ説明しえない無意味な経済学になる。企業組織，制度を無視して，生産技術の制約のもとで利潤極大化あるいは費用最小化を図る企業者というのは余りにも非現実的ではないか。いや，理論レベルで問題にしているのは，時代，国，制度，組織とは独立に作用する企業家行動の原理であって，この原理が現実にどのように現われるかはまさに実証分析の問題であり，そこでは制度，組織，産業政策などを考慮しなければならない等々である。

他方，本質的な要素が見失われていないかどうかを検証することができるような便利な方法は，あらゆる科学がもっていない。図式のなかにとり入れられた要素は意味があるかどうかさえ簡単には検証できない。図式あるいは理論モデルがいつも数学的に定式化されるとは限らない。したがって数学モデルのように，モデルからの論理的帰結が事実と対決せしめられ，モデルが棄却あるいは受容される，という仮説・演繹法によって検証過程が進行していくわけではないからである。

結局前述の問いに対しては次のような常識的回答にならざるをえない。シュンペーターもこの回答に異を唱えないであろうと私は考えたい。事実から，分析者が分析目的にとって本質的と考える

注 (33) 〔9〕39頁。
(34) 〔9〕21頁。

要素を抽象し，それをモデル化する。この理論モデルは必ずしも数学的に定式化されている必要はない。この理論モデルからの論理的帰結を統計的事実あるいは歴史的事実によって検証するという，帰納的推論と広い意味での仮説・演繹法の共同作業こそ図式としての理論を意味あるものとするであろう。この叙述は常識の域を出ていない。しかしそれで十分である。実際的研究を離れて方法論議に花を咲かせても，そこに経済学の果実が実を結ぶことはないであろう。

（2） 理論とは道具箱であり，たんなる説明的仮説ではない

前項のように，理論を事実に対する図式と言明すれば，理論に説明的仮説としての役割を担わせているにすぎないかのような印象を与える。確かに理論は説明的仮説としての意味も有しているが，仮説形成のみが経済理論家の唯一の仕事ではない。限界代替率，限界生産力，乗数，加速度因子のように，結論を仮説（あるいは公理あるいは公準あるいは仮定もしくは原則）から引きだしうるような道具を工夫することも重要な理論家の仕事である。この意味で経済理論とは道具箱にほかならない。

消費者行動理論を分析しようとすれば，効用関数，限界効用，限界代替率，所得効果，代替効果，スルツキー方程式，0次同次，間接効用関数，エンゲル集計条件，クールノー集計条件等々の概念とそれらが有している意味および役割を知らなければならない。これらの分析用具を開発することも理論家の仕事であり，これらは説明上の仮説を与える理論とは異なっている。シュンペーターは，経済学者に，実践的処方箋書きで憂き身をやつすことなく，この道具箱の中味を豊かにするよう期待した。

しかし道具箱としての理論の意味は何も経済学に特有なことではない。しかし経済学には他の科学と並行的に論ずることができない特色あるいは制約がある。経済学における情報の源泉は，研究室内の実験ではなく，「経済行動の意味に関する人々の広汎な知識」[35]を利用することにある。このような情報を利用することができるという点は，物理学にはみられない特色である。この経済行動から得られる定理（たとえば，限界効用均等のとき効用最大，あるいは $MC=MR$ の点が利潤極大点を与える）は，いわゆる経験法則とは異なり，「何びとかがこれに準拠した行動をとるか否かには全くかかわりなく，真理であるとされるような一定状況と結果との論理」[36]である。経済理論はこのような「論理的（もちろん倫理的ないし政治的でない）理想または規範たる・一群の経済的定理」[37]を導出する。

恐らくシュンペーターが予期した以上に，「一定状況と結果との論理」にすぎない「定理」が氾濫しているというのが現状である。数理経済学の発達は，このような，それ自体としては意味のない「定理」を氾濫させた。レオンチェフが，苦々し気に，これほど貧弱で皮相的な事実を基礎とし

注（35）〔18〕32頁。
（36）〔18〕32頁。
（37）〔18〕32頁。

て，これほど巧緻な理論構造がうち立てられた例は，現代実証科学において，他にほとんど例をみない[38]と講演したのは1953年であったが，この意味では事態はその後一層悪化したといえよう。「一定状況」を支える補助仮説の経験的妥当性が検討されることなく，補助仮説から結論を導出する数理のみが肥大化した。もちろんシュンペーターに責任はない。責任は，現実を説明すべき仮説としての理論の側面を等閑に付し，あるいは軽視してきた理論経済学者と，統計的仮説検定の枠組みのなかに現実を倭小化させてしまった計量経済学者にある。

（3） 理論は諸要素間の関数的関係を記述する

理論のおこなう説明は，可能な限り簡単で普遍妥当的な定式によって，経済体系諸要素間の相互依存関係あるいは関数的関係を記述することである。この定式をシュンペーターは法則とよぶ。

経済学における法則概念は無数の誤解と批判にさらされてきた。人間行動に法則性はあるのか，法則性があるとすれば自由意志は否定されるのか等々である。これらの議論には形而上学や政治的観点が介入し，議論はますます不快なものになった。シュンペーターの定義による経済法則は「道徳的命令の如き要請では決してない」し，「いかなる理想をも現実に対立させる」ものでもない。それは単に「現実の現象の一形像（ビルド）にすぎない[39]」。経済法則に規範的意味はない。法則について言及することは，その妥当性が望ましいということを意味しないし，ましてやその法則の成立をめざして経済政策を基礎づけるべきであるなどということも意味しない。規範を論じ始めれば，あのむなしい形而上学的思弁が顔を出す。「われわれはなんらかの「必然性」を根拠としてかくあらねばならぬものについて哲学するのではなくて，多くの場合かくあるものを記述するのである[40]」。

シュンペーターが，理論によって「現象間の関数的関係」を記述すると述べたのは，因果という用語を注意深く回避しようとしたからである。ある現象の原因を，その第1原因まで追求していくなどということは不可能である。因果の連鎖をどこまでも辿っていけば，自然の背後に神霊をみる野蛮人か，神を第1原因として導入するアリストテレスか，すべての現象の背後に意志をおくショーペンハウエルのようになり，経済学がまた深い霧のなかにつつまれてしまうことをシュンペーターは憂慮したにちがいない。

経済理論によって経済体系諸要素間の関数的関係を記述するというシュンペーターの叙述は，マッハ（1838～1916），あるいはマッハ哲学の影響を強く受けた統計学者K．ピアソン（1857～1936）を想起させる。K．ピアソンは『科学の文法』で次のように述べた。「科学はいかなる場合にもある連繋に必然性が内在することを証明することもできないし，その連繋がくり返されるに相違ないということを，絶対的な確実さをもって証拠だてることもできない。科学は過去に対しては1つの記述

注（38）〔4〕44頁。
（39）以上3箇所の引用はいずれも〔9〕40頁。
（40）〔9〕40頁。

であり，未来に対しては1つの信仰である。もし説明という言葉が，知覚の連繋の必然性を示すことを意味するならば，科学は決して説明でもなければ，また説明であったこともない」。「知識は本質的には記述であり，何ら説明ではない」[41]。

また，マッハは，科学は因果関係を明らかにするものではなく，事実の概括的な記述のみを宗とすべきであると主張した。マッハが因果的説明を斥けようとしたのは，因果論にはアニミズム（擬人主義）という原始的な世界観が顔を出すこと，因果性は容易に必然性と結びつきやすいということにあった[42]。

シュンペーターが1901年ウィーン大学に入学したとき，マッハはウィーン大学哲学教授であった。このマッハの影響を受けたのかどうかわからないが，シュンペーターが『理論経済学の本質と主要内容』で経済法則と因果概念をことさら区別しようとしたのは，歴史主義，すなわちマルクス主義者の歴史的必然性を容認する見解と誤って解釈される危険が当時あったのであろう。

シュンペーターの法則観は K. ピアソンとも異なっている。シュペーターは K. ピアソンのように「説明」に必然性の意味を付与していないし，「説明」を「記述」の対立概念としても用いていない。因果概念を回避しようとしたのは，究極原因を追求していけば，経済学から逸脱して心理学，生物学あるいは形而上学的思弁へと議論が発散していく無意味さを見通していたからでもあろう。

因果の連鎖を第1原因まで追求せず，経済現象の生起を非経済的要因によって説明できるならば，そこに因果を認めることにシュンペーターはやぶさかではない。「われわれが経済的事物の一般的形式について，またその規則性について，あるいはまたそれを理解するための鍵について尋ねるという場合に，われわれがこれによって事実上意味することは，まずそれらを研究さるべきもの，求められるべきもの，「未知なるもの」と考え，それらを比較的に「既知なるもの」に還元しようとすることにほかならない。これは一般にあらゆる科学がその研究対象についておこなうことと異ならない。したがって二つの現象の間に一定の因果関係を見出すことに成功した場合，この因果関係において「原因」の役割を演ずる現象がもはや経済現象でない場合には，われわれの任務は果たされたのである。……これに反して，この「原因」自体がさらに経済的性質のものであるならば，われわれはさらに非経済的原因に到達するまで説明の努力を続けなければならない」[43]。したがって，「われわれの問題はつねに経済的事実を非経済的与件に結びつける因果関係の一般的形式を叙述することである」[44]。

シュンペーターはマッハ哲学から影響を受けていると言われることがあるのは，関数的関係とか記述という両者が用いる用語の類似性からの臆則にすぎない。シュンペーターが強調したかったの

注（41）以上2箇所いずれも〔6〕113頁。
（42）〔5〕77～8頁をみよ。
（43）〔10〕28頁。
（44）〔10〕29頁。

は,「現象相互間に成立する経験可能な関係」の認識こそ経済学における法則性の認識であるという点である。ケネーの経済表とワルラス（1834～1910）の一般均衡理論をシュンペーターがきわめて高く評価するのは，彼らが相互依存関係を認識し，表あるいは同時方程式体系としてそれらを明示したからである。因果ではなく関数的関係を，説明ではなく記述を，とはシュンペーターは主張していない。

（4） シュンペーターの立場は「科学主義」ではない

シュンペーターは自然科学とくに物理学の方法を評価する。しかしハイエク（1899～ ）のいう「科学主義」ではない。

科学主義または科学主義的偏見とは,「研究の一般精神ではなく,≪科学≫の方法なり言葉遣いについての卑屈な模倣にかかわる考え方」をいう。「この態度は，ある思考習慣を，それが作り上げられて来た分野とは異なった分野に機械的,無批判的に適用する態度を含んでいる」[45]。物理学や生物学の成功に魅せられて，社会科学もこれらの学問の教理や言葉を急速に真似るようになった。社会科学は社会科学特有の問題に自らの方法をよりよく適応させることよりも，物理学や生物学の方法と同じであることを誇示することによって同等の地位を要求しようとしてきた。≪科学≫の精神ではなく方法を真似ようとするこうした野望が現在に至るまで社会科学を支配しているが，しかしこの野望は社会現象の理解にはほとんど貢献していない[46]。これがハイエクの批判する科学主義である。

物理学や生物学で成功をおさめた数理的な仮説・演繹法が無批判的に社会現象に適用されても同様の成功はもたらされない，とハイエクが批判するのは正しいが，しかし,「不幸にして真の問題は，ここにはない」とシュンペーターは言う。高等数学の概念や手筈は，最初，物理学者の問題との関連で発展したことは確かであるが，しかし数学用語に物理学者的なものが染みこんでいるわけではない。物理学者の問題を借用してこなければ，経済学で限界概念が発見されなかったと考えることは荒唐である。

同様に，物理学の概念を，経済学者は無批判的に経済学の中へ持ちこんだのではない。均衡，振動子，動学の如き物理学の概念が経済学で用いられる。しかし，たとえば振動子という概念を経済学で使用するとき，単にその言葉のみを借用したのであって，この言葉のもつ自余のものではない。それでは一体なぜ経済学は「科学主義」に毒されているというような幻想が，あるいは自虐的錯覚が生じたのであろうか。2つの事情がある，とシュンペーターは言う[47]。

(i)物理学者や数学者がこれらの一般概念を思いつくとき，彼らは命名するばかりでなく，その論理をも作り上げてしまう。この論理に物理学者的なものが導入されていない限り，経済学者がこの

注（45） 以上2箇所の引用は〔1〕6頁。
（46） 〔1〕4頁。
（47） 〔18〕34頁。

論理を利用するのは有益である。しかし経済学者は一般的概念に対する命名と論理が完成した後で遅れてそれらを利用するため，単に物理学の真似をしているだけであるかのように思われる。

(ii)同じ用語が経済学と物理学で使われるとき，容易に物理学的類推が行われ，経済学の内容よりも一層容易にこの類推の方が理解される。このことが，経済学は物理学からいくつかの概念を借用してきたと単純に思いこまれる理由になった。

ペティの研究手筈もニュートンのそれを借りたものではなかったし，経済静学とか動学の概念も経済学者よりも先に自然科学者によって規定されただけであって借用したわけではない。経済静学という概念の利用は，幼稚でかつ無意識的であったかも知れないが，経済分析の発端からすでに行われていた。

数学的に定式化された関係式のみをあつかう数理経済学および計量経済学は，まさに科学主義の典型的な例であるかのような誤解を受けやすい。計量経済学の方法は仮説・演繹法である。しかしそれだけである。物理学の方法を借用したわけでも，無批判的に適用しているわけでもない。思弁的に，あるいはレトリックによって議論が展開されてきた経済学の世界が，数理の使用によって，あるいは統計的仮説検定の導入によって著しく開け，議論がより客観的になったことを否定する人はいないであろう。

現在生じている問題は，自然科学の方法を無批判的に経済学に借用してきたというような，多分に誤解にもとづく点にあるのではない。統計的仮説検定のくり返しのみが実証分析と思われ，主として回帰分析の技法のみ異常に発達し，歴史的分析が理論的・統計的分析と結びつかなかったこと，科学の進歩は実証主義の観点からのみならず，広範囲の事実を，新しい概念や理論から説明することによって，新しい実験が導かれ，新事実の発見がもたらされるという第2の道筋を，計量経済学者は軽視し，統計データのなかで埋没してしまったことにある。以上の点を考えるならば，「今日にいたるまで経済学は，物理学を〈科学〉の規範としてあがめたてまつり，その方法を逐一模倣してきた[48]」という指摘は誇張であるというより，経済学は「科学主義」であるという誤った観念を抱かせるという意味で有害でさえある。

（5） 均衡理論の意義

理論経済学者シュンペーターは，均衡理論の意義と限界を明確に認識していた。均衡理論を非現実的な「夢の国」の物語りとして一蹴する態度とも，均衡理論しか知らない人とも無縁であった。

理論に説明的仮説としての役割しか認めない人，および経済学の均衡概念をニュートン力学の均衡概念と同一視し，さらに均衡状態を善として，規範としてとらえる人は，均衡理論の意義を評価できない。現実は絶えざる与件変動と攪乱にさらされており，不均衡状態であるのが常である。均

注（48）〔8〕17頁。

衡点はつねに移動し，所与の与件変動あるいは攪乱の影響が波及しつくしたあと，経済が均衡状態に達するということも決してない。このことは真である。しかしそこから一挙に，だから均衡理論は無意味であると言えるだろうか。

均衡理論がきわめて重要な分析用具である理由をシュンペーターは4つあげている。[49] 第1に，均衡理論または循環的流れの理論は経済理論の骨格を与える。この均衡理論は確かに抽象的で実生活からかけ離れているが，厳密な分析の基礎はこの均衡理論によってあきらかにされる。具体的な，現実の経済の不均衡状態を説明する不均衡理論がまずつくられ，ひきつづいて次に均衡理論が完成したのではない。論理の本質をより鮮明に描き出す均衡理論から出発したのは賢明であり，健全であった。第2に，与件変化によって，あるいは体系自体の生み出す変化によって，体系がどのように変化するかは均衡理論によって分析できる。この意味で，均衡理論は反応装置の記述である。第3に，均衡状態は参照点として有用である。実際の状態は均衡状態からの乖離によって都合よく定義できるから，均衡状態が実現することは決してないとしても，均衡状態という概念は，分析や診断において，参照の点として有用である。第4に，均衡概念が用いられるときもっとも重要な点は，均衡への傾向があるという確信のもとで，現実の経済分析が進められることにある。[50]「参照点としての理想的均衡点がたんに存在するということ」ではなく，体系が均衡への傾向をもつという主張の論拠は次の点にある。経済変数の値が，常識で考えて異常に高い数字と異常に低い数字と思われる2つの数字の間で，景気循環の進行中に変動するという事実，およびやはり常識で考えて正常と認められる値あるいは値の区域がこの2つの極値の間のどこかにあるという事実である。しかしいかなる時期にもこの均衡への傾向を仮定することは間違っている。「現在の状態が，たとえば政府の不換紙幣で賄われる戦争や，鉄道建設『熱』によって攪乱されつつある最中には，これらすべての不均衡と共存する理想的均衡について語ることには，ほとんどなんの意味もない」。[51] したがって体系が均衡に近づきつつあると考えられる場合のみその存在を仮定する。それは時間的に不連続な点であろう。そして実際の体系は，点としての均衡状態に決して到達するわけではないから，均衡点ではなく，均衡の近傍を考察するというシュンペーターの接近方法が示される。

均衡概念をニュートン力学から借用してきたことによって生じた問題は次の3点である。第1に，シュンペーターは否定したが，力学的用語のなかに含まれる力学的概念をもそっくり呑みこんでしまった経済学者がいる。力学的均衡値は同時に力学的効率であり，まさに最適値，すなわち望ましい状態を示しているが，経済均衡に望ましいという規範的意味はない。シュンペーターやサミュエルソンはこのような混同をしていないが，ほとんどの経済学者は力学的均衡と経済学的均衡を同一

注 (49) 〔14〕98～101頁，〔18〕第7章。

(50) ヒックスはさらに「たとえ均衡が存在し，それに向う傾向が存在するとしても，なおその収斂が非常に遅いようであれば，均衡の仮定を正当化する根拠はまだ充分ではない」(〔2〕31頁) と述べている。

(51) 〔14〕101～2頁。

視した。現実を均衡状態として把握し，均衡を規範と混同すれば，経済学は見事に現実に生じている問題に何も処方箋を書く必要はない。彼らに何も“問題”は生じていないからである。

第2に，静態的状態とは「分析されるべき客体の一定の状態，すなわち，一様の率を以て運行している経済過程，更に厳密にいえば，自分自身を単に再生産しているにすぎない経済過程を指す……本質的には，それは1つの簡単化の工夫である」。静態的状態は現実ではないし，資本主義社会がそのような状態になることは決してありえないが，われわれは静態的状態下の経済過程が「いかなる外観を呈するか，また現実の諸現象のうちの何れのものがそのなかに存するかを凝視しようと試みる場合に，われわれは事実そのものによって，そのうちの何れかのものが欠けているのを発見する」[52]。このような意味において，静態的状態は方法論的擬制にほかならない。ところが，「静態的状態の概念は……方法論的擬制としてよりも，むしろ将来のいつかの時に期待されるような経済の現実的状態を示すものとして使われた」[53]。さらに，たとえ外的攪乱によって不均衡状態になったとしても，均衡への傾向が存在し，かつ収斂速度が十分速いと，恐らく暗黙のうちに仮定されることによって，ケインズが注目した不均衡状態における経済問題を，たんなる一時的で過渡的な現象として看過する態度を醸成した。

第3に，そもそも均衡への傾向が存在し，収斂速度が速やかであるという仮定自体適切かという問題がある。均衡への傾向が存在したとしても，収斂速度がきわめて緩やかであるため不均衡状態に長くとどまり，そこから失業あるいはインフレーションあるいは他の不均衡状態であるがゆえに生じてくる諸問題がある。「収斂性の公準」を信奉することによって，経済学者は現実に生じている問題から目を逸らし，適切な手を打てなくなる，いや打つ必要を認めないという態度になるであろう。

最後に，シュンペーターのミッチェル評によって，理論の節の結びとしたい。既述したように，シュンペーターは，説明的仮説としての理論と，分析の道具箱としての理論を区別した。説明的仮説はもっと事実を掌握できるよう定式化されるべきこと，たとえば，これまでの景気循環論はいずれも本格的な立証に欠けていて，事実の光に照らされるならばたちまち色あせてしまう，とミッチェル（1874～1948）が感じていたのであれば，われわれのほとんどは彼と意見をひとつにするであろう，とシュンペーターは述べた[54]。

しかしミッチェルが，均衡の静態理論を「夢の国」として斥けるとき，彼はモデルというものが経済分析で有している意義を十分認識していない。公準とかモデルの無矛盾性とか決定性などにたずさわっている人々は，ミッチェルにとって経済学者とは映らなかったにちがいない。事実へ接近していくときに，「理論」なしに全く客観的な調査とか事実の把握などということはありえないか

注（52）以上2箇所いずれも〔18〕2036頁。
（53）〔18〕2039頁。
（54）〔18〕2452～3頁。

ら，ミッチェルも「概念の道具，すなわち図式を用いることに反対するような不条理な誤りは犯していない[55]」。しかしミッチェルが理解しようとしなかったのは分析的装置としての意味の理論であった。経済主体の合理的図式は，行動の型の論理を叙述するためであり，「この合理的叙述の主体達がそれ自ら合理的に感じたり行ったりすることを少しも意味しない[56]」という議論にミッチェルは全く耳を傾けようとしないであろう。シュンペーターは次のようなエピソードを伝えている。「私がかつて彼に，君の1913年の大著[57]は，その議論の骨格に関する限り，均衡の動態理論の実習だと説明してみた時の彼の唖然とした驚きをけっして忘れることができぬであろう[58]」。このエピソードはミッチェルを語り，シュンペーター自身の科学観をも映し出している。

3 統　　計

（1） 統計の必要性

統計は経済学にとってきわめて重要であり，この点は少なくとも16,7世紀以来認められてきている。しかしこのことは「今日に至るまで若干の経済学者によって執拗に否定されてきた[59]」。現代の経済研究者にとって統計的方法を修得することは「経済学者がナンセンスなことを言明するのを防ぐための，一つの必要な（しかし充分ではない）条件なのである[60]」。

経済理論は研究の道具箱にすぎないから，「それは統計または統計的でない記載によって供せられる事実が当てがわれなくては，なんの具体的な結論をも生むことができない[61]」。シュンペーターのこの主張は次のように言い換えても真意を損なうことにはならないであろう。分析的装置としての理論も，現実との接点を見失わないためには，補助仮説系と歴史的事実，論理的展開と歴史的事実，論理的帰結と現実とが常に緊張・対立・相互依存の関係になければならない。このようにして，研究の道具箱たる理論と事実研究から，説明的仮説としての理論モデルがつくられねばならない，と。

（2） 忘れられた数量分析

理論的命題に統計的事実が当てがわれなくてはならないということを，17世紀の政治算術学派は明確に認識していた。しかしペティの「人を鼓舞するようなメッセージや示唆に富むプログラムは，かのスコットランドの教授〈アダム・スミス〉の堅苦しい筆致のなかに枯れ凋んでしまって，250

注（55）〔17〕343頁。
（56）〔17〕346頁。
（57）『景気循環』
（58）〔17〕346頁。
（59）〔18〕27頁。
（60）〔18〕26頁。
（61）〔18〕2400頁。

年の間大多数の経済学者にはほとんど看過されてきた[62]」。

シュンペーターが，アダム・スミスの過失とよんでいるのは，『国富論』のなかの「わたしは政治算術をそうたいして信用していない[63]」という発言である。シュンペーターは，この一言に集約されているスミスの経済学へのアプローチが，その後の数量分析の運命を定めたとして重視している。スミスは経済学を道徳哲学の一分野とみなし，道徳科学として経済学を展開したため，経済学は哲学的衣裳を脱ぎ捨てることができなかった。このようなスミスの経済学が，数学的論理と数量化による実証によって思弁を排し，形而上学から脱しようとする政治算術学派の精神を枯れ凋ませてしまった，とシュンペーターは主張したかったに違いない。

しかしいずれにせよ，ペティの『政治算術』以来，仮りにエッジワース（1845～1926）の業績を無視するとすれば，シュンペーターが言うように，約250年の長きにわたって理論的・数量的分析が忘れ去られてきたことになる。確率論，ガウスの誤差法則，最小2乗法，「これらは〈本来〉経済学者の道具箱に加えられるべき重要な業績[64]」であった。19世紀末に至るまで，これらの業績を利用する機会が到来していることを告げる証拠は何もない。「むしろ反対に，この期間[65]には統計学者の純粋理論と経済学者の純粋理論とはほとんど完全に絶縁されていた，――否，今日に至るまで絶縁のままになっている[66]」。（「今日に至るまで」，すなわち『経済分析の歴史』執筆時の1940年代に至るまでというシュンペーターの指摘はもちろん正確ではない。それともこの稿は1910年以前に書かれたのであろうか）。このように言ったからといって，読者がこの事実に本当に驚きの念を抱くかどうかさえ怪しい。それほど経済学と統計学との結びつきは稀薄であった。「経済学者は数字を提示する最も原始的な工夫を利用することさえできなかった[67]」。事実を提示しようとする経済学者は物価指数の利用を躊躇し，理論経済学者は物価指数論を提供するのに躊躇した。この期間の指導的な経済理論家J．S．ミルも，事実調査に多くの時間を投じたが，統計的方法との接触を全くもたなかった。この状況は「知性の怠惰に発する無知」としか言いようがない。

「計量経済学のシュトゥルム・ウント・ドランゲの時代」が始まるのは1910年代へ入ってからである。この時代を迎えるまで経済理論は計量分析と結びつかなかったこと前述の通りである。「最も偉大なものの若干を含めて理論家の多数は，結局のところ数値的な結論を確保するかもしれない理論の可能性を，完全に自覚していなかった。従って彼らにとっては自分たちの図式を組み直して統計的な取扱いの余地があるようにしようとする考えは，決して湧いてこなかった。かかる考えこ

注（62）〔18〕439頁。
（63）岩波書店，793頁。
（64）〔18〕1102頁。
（65）18世紀末から19世紀末。
（66）〔18〕1103頁。
（67）〔18〕1105頁。

そ彼らには夢想的なものと映じたことであろう[68]」。

もちろんシュンペーターは，ジェヴォンズ(1835～1882)，エッジワース，クールノー(1801～1877)を忘れているわけではないし，マーシャル(1842～1924)の講演「経済学者の新旧両世代」(1896)を「指導的な理論家の手になる計量経済学的プログラムに味方する最初の宣言[69]」と評価している。計量経済学者にとっては奇異に感じられるが，シュンペーターは，ジェヴォンズよりもクールノーの方が計量経済学に接近していると次のように述べている。確かにジェヴォンズは指数問題のような数値的研究はしたが，分析装置を，終局的には，計量経済学的研究と結びつけることを明瞭に認識しつつ構築したという意味では，クールノーの方がジェヴォンズより前進した。「数値の馬がジェヴォンズのフェンスを跳び超えようとすれば，それはクールノーの道を駆けるよりむずかしい[70]」。

それでは一体なぜこのように長期にわたって計量分析はまどろみ，「知性の怠惰」が続いたのであろうか。シュンペーターは，経済学が道徳科学に分類されたこと，経済学者は時事の実際問題に没頭しすぎたことをその理由として挙げ，レオンチェフは，補助仮説の経験的妥当性を無視してきた理論家の姿勢が現実との接触を欠くようになったことを強調する。

シュンペーターは「エコノメトリカ」創刊号の論文“計量経済学の常識”において，経済学はあらゆる科学のなかでもっとも数量的であるにもかかわらず，このことが明確に認識されなかった理由を2つ挙げた。第1に，いつも科学を分類することに喜びを見出してきた哲学者達は，経済学をどこに位置づけるべきかで不安を抱いていた。彼らは自然科学と道徳科学の間の経験的境界線に従い，経済学を道徳科学に分類した。そのため経済学の数量的側面は発見されていたが，不適当な土台の上にのっていたため，数量的側面は土台の下にかくれてしまった。第2に，経済学は時事問題に余りにも多く関わってきたために，経済学は不満足な状態にとどまり，計量経済学は無視された。直接実践的目的に適うことばかりが考えられている雰囲気のもとでは科学は進歩しない。物理学者が，経済学者のように，直ちに応用可能なことばかり追求してきたとすれば，現在の生活の便利さはないであろう。その日の焦眉の問題に敏速かつ簡単な解答を切望する人は，数年間にわたる辛抱強い研究のみが明らかにすることができる困難な問題に取り組むことをしない。

他方，レオンチェフは，1948年『現代経済学展望』所収論文“計量経済学[71]”において，理論の先験的仮定の経験的妥当性が等閑視されてきたために，理論は現実との接点を失い，「空虚な抽象の箱」empty boxes of abstract になってしまったと次のように批判した。(数学を駆使する)「演繹的理論家が特殊状況の分析に参入するにつれて，ますます彼は条件つき定式化に訴えざるを得なくなってきた。彼の著作は，代数記号を含む抽象モデルで充満するようになった。ところが代数記号

注 (68) 〔18〕2032頁。
(69) 〔18〕2033頁。内容については〔20〕(下) 349頁参照。
(70) 〔13〕
(71) 〔3〕

で表されている数量は未知のままであった。経済理論は，しばしば先験的仮定とよばれる諸仮定から導出できる結論の枠を超えて歩み始めるや否や，明らかに現実との接触を欠き始めた。(現実との接触を保っていれば）この先験的諸仮定は，一般的経験命題としてもっと現実を表現できたであろう」。

レオンチェフの挙げたこの理由は，数量分析の空白時代特有の理論家の通弊というよりは，むしろ，皮肉にも，彼の論文以降の計量経済学全盛の時代に，数理の肥大化した時代に当てはまる。シュンペーターの挙げた第2の理由も，経済分析の遅れを説明し得ても，なぜ計量分析が著しく停滞してしまったのかを十分説明できない。結局，政治算術学派の理論的・数量的分析がなぜ枯れ凋んでしまったかの解明は今後に残された課題である。

（3） 計量経済学のシュトゥルム・ウント・ドラングの時代

「空虚な抽象の箱を満たそうとする最初の入念な試み，すなわち，統計データを用いて理論的議論をするという試みは，アーヴィング・フィッシャーの『貨幣の購買力』The Purchasing Power of Money (1911) によってなされた。計量経済学のシュトゥルム・ウント・ドラングの時代が始まった」[(72)]。

シュンペーターが『理論経済学の本質と主要内容』で予見した理論と統計的分析の結合は，1910年代に入ると，およそ250年にわたる長いまどろみから覚め，まさに疾風怒濤のごとく押し寄せた。主な業績を列挙してみよう。

1911 アーヴィング・フィッシャー『貨幣の購買力』The Purchasing Power of Money
1911 ヘンリー L. ムーア：『賃金の法則』Laws of Wages
1914 レーフェルト："小麦需要の弾力性"
1928 P. H. コブ，C. W. ダグラス："生産の理論" Theory of Production
1928 H. シュルツ：『需要と供給の統計的法則——とくに砂糖への応用』Statistical Law of Demand and Supply with Special Application to Sugar
1932 R. フリッシュ：『限界効用測定の新方法』New Methods of Measuring Marginal Utility
1934 P. H. ダグラス：『賃金の理論』Theory of Wages
1934 C. F. ルー：『動態経済学，需要，生産および価格の理論と統計的研究』Dynamic Economics, Theoritical and Statistical Studies of Demand, Production and Prices
1936 J. ディーン：『費用の統計的決定』Statistical Determination of Costs
1936 E. H. フェルプス・ブラウン：「エコノメトリカ委員会報告書」
1938 H. シュルツ：『需要の理論と測定』Theory and Measurement of Demand
1939 J. ティンバーゲン：『景気循環論の統計的研究』Statistical Tests of Business-Cycle Theories, I. A Method and Its Application to Investment Activities; II. Business Cycles in the United States of America, 1919—1932

これらの優れた諸業績を挙げた経済学者のなかでも，とりわけ I. フィッシャーに，シュンペータ

注 (72) 〔3〕

ーは，ペティ以後の計量経済学開拓者のなかでもっとも重要な人物であると最大級の頌辞を呈する。[73] フィッシャーの業績は，計量経済学会の「経済理論を統計学および数学と関連させて前進させる」，「経済問題への理論的・数量的接近と経験的・数量的接近との統一を図る」という綱領と理想的に適合していると讃辞を惜しまない。「偉大な開拓者的冒険」の書である『貨幣の購買力』のもっとも重要な点は，「この書の論証の全体が統計的計算可能性の基準に連結しているということ，およびそれが統計的測定に導き得ない概念または命題を避けている」ということにある。理論的概念が統計的に測定可能な形で提示される，という点をシュンペーターは重要視する。ジェヴォンズよりクールノーを評価するのもこの点からであり，一般均衡理論を創っただけでなく，数量的分析を数値的分析へと発展させる手がかりを与えたとしてワルラスを計量経済学の立場から頌するのもこの点である。

「集計的理論というからくり」を確立させ，「リカードの弊風」の現代版であるとケインズを批判したシュンペーターであったが，計量分析への刺激を与えたという業績は他の業績よりも生き延びるであろうと，多少の，いや相当の皮肉をこめて，ケインズを評価したのもこの点においてである。シュンペーターは“ケインズと統計学”で次のように述べた。「ケインズモデルを時系列資料と結合させるためには若干の困難があったが，他のモデルとくらべれば解決ははるかに容易であった。ケインズは統計学に興味を示さず，時系列分析の論理に何の貢献もしなかったが，計量分析の一層の発展が緊要であるような状況を創り出し，その発展への刺激を与えた。彼自身統計的研究家ではなかったが，ケインズによる統計的研究への刺激は彼の他のいかなる業績よりも生き延びるかもしれない。ケインズは彼の意図した以上のものを創造したのである」。1936年のフェルプス・ブラウンの「エコノメトリカ委員会報告書」についても，限界生産力という理論的概念を実際に統計データによって測定したことを評価し，「限界生産力説は単に安楽椅子によりながらの思弁にすぎないという考え方の蒙をひらいた」[74]と賞讃した。

この計量経済学の疾風怒濤の時代に，1930年には計量経済学会が創立され，1933年，学会機関誌「エコノメトリカ」Econometrica が創刊された。他方，ノルウェー，スウェーデン，オランダではR. フリッシュ (1895～1973)，H. ウォルド (1908～　)，T. クープマンス (1910～　) が，アメリカ合衆国では，シカゴ大学コールズ委員会が，計量経済学方法論を研究し始めた。その成果は，計量経済学の輝く金字塔である「コールズ委員会モノグラフ」として上梓された。17世紀後半に発芽した計量経済学は，2世紀余を蓄のまま過ごし，20世紀を迎えて見事に開花したのである。(未完)

〔参考文献〕

〔1〕 Hayek, F. A. (1952). *The Counter-Revolution of Science: Studies on the abuse of reason,* The

注 (73) 〔17〕
(74) 〔18〕2032頁。

Free Press, 佐藤茂行訳『科学による反革命』, 木鐸社, 1979.

〔2〕 Hicks, J. (1965). *Capital and Growth,* The Clarendon Press, 安井琢磨・福岡正夫訳,『資本と成長』I, II, 岩波書店, 1970.

〔3〕 Leontief, W. (1948). Econometrics, in H. S. Ellis ed., *A Survey of Contemporary Economics,* The Blakistan Company, 1948.

〔4〕 ――――――(1966). *Essays in Economics,* Oxford University Press, Inc., 時子山和彦訳『経済学の世界』, 日本経済新聞社, 1974.

〔5〕 Mach, E. (1918). *Die Analyse der Empfindungen und das Verhältnis des Physichen,* Verlag von Gustav Fisher, 須藤吾之助・広松渉訳『感覚の分析』, 法政大学出版局, 1971.

〔6〕 Pearson, K. (1892). *Grammer of Science,* 平林初之輔訳『科学概論』, 春秋社, 1930.

〔7〕 Petty, W. (1690). *Political Arithmetick,* 大内兵衛・松川七郎訳『政治算術』, 岩波文庫, 1955.

〔8〕 佐和隆光 (1982).『経済学とは何だろうか』, 岩波新書。

〔9〕 Schumpeter, J. A. (1908). *Das Wesen und der Hauptinhalt der theoritichen Nationalökonomie,* Duncker & Humblot, 木村健康・安井琢磨訳『理論経済学の本質と主要内容』, 日本評論社, 1936.

〔10〕 ――――――― (1912). *Theorie der wirtschaftlichen Entwicklung,* Duncker & Humblot, 塩野谷祐一・中山伊知郎・東畑精一訳『経済発展の理論』, 岩波書店, 1977.

〔11〕 ――――――― (1914). *Epochen der Dogmen und Methodengeschichte,* J. C. B. Mohr, 中山伊知郎・東畑精一訳『経済学史』, 岩波文庫, 1980.

〔12〕 ――――――― (1915). *Vergangenheit und Zukunft der Sozialwissenschaften,* Duncker & Humblot 谷嶋喬四郎訳『社会科学の未来像』, 講談社学術文庫, 1980.

〔13〕 ――――――― (1933). The Common Sense of Econometrics, *Econometrica,* Vol. I.

〔14〕 ――――――― (1939). *Business Cycles: A Theoretical, Historical and Statistical Analysis of the Capitalist Process,* McGraw-Hill Book Co., Inc., 吉田昇三監修, 金融経済研究所訳『景気循環論』, 有斐閣, 1958～1962, 全5巻。

〔15〕 ――――――― (1946). Keynes and Statistics, *Review of Economic Statistics,* Vol. XXVIII.

〔16〕 ――――――― (1947). *Capitalism, Socialism and Democracy,* Harpe & Brothers, Revised Edition, 中山伊知郎・東畑精一訳『資本主義・社会主義・民主主義』, 東洋経済新報社, 1950～52, 改訳版, 1962, 全3巻。

〔17〕 ――――――― (1951). *Ten Great Economists: from Marx to Keynes,* Oxford University Press, 中山伊知郎・東畑精一監訳『十大経済学者』, 日本評論社, 1952.

〔18〕 ――――――― (1954). *History of Economic Analysis,* Edited by E. B. Schumpeter, Qxford University Press, 東畑精一訳『経済分析の歴史』, 岩波書店, 1955～62, 全7巻。

〔19〕 Singer, C. (1959). *A Short History of Scientific Ideas to* 1900, 伊東俊太郎・木村陽二郎・平田寛訳『科学思想のあゆみ』, 岩波書店, 1968.

〔20〕 杉本栄一 (1981).『近代経済学の解明』(上), (下), 岩波文庫。

（経済学部教授）